

國學院大學學術情報リポジトリ

書評 中嶋哲也著『近代日本の武道論：
〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 大誠 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001374

【書評】中嶋哲也著『近代日本の武道論―〈武道のスポーツ化〉問題の誕生―』

藤田 大誠

【要旨】

本稿は、中嶋哲也著『近代日本の武道論―〈武道のスポーツ化〉問題の誕生―』（国書刊行会、平成二十九年七月二十四日発行、六〇八頁+xi頁）に対する書評である。また、本書評は、英国ウェールズのカーディフ大学出版会が刊行してゐる学術誌『Martial Arts Studies Journal』における「日本の武術研究」をめぐる特集号に寄稿し、掲載されたBOOK REVIEW（英文書評）の元原稿（邦文）に手を加へたものである。近代武道史に関する主要な事柄を網羅して論じた本書は、当該テーマの最前線を走る研究であると評することができ、また、本書のユニークな成果は、世界各国における固有のマーシャル・アーツ的身体文化と「スポーツ」概念との歴史的関係の事例とを照らし合はせることにより、極めて有意義な国際文化比較となり得ることなどを指摘した。

【キーワード】

武道 スポーツ化 マーシャル・アーツ 講道館柔道 大日本武徳会

一 「武道」と「マーシャル・アーツ」の両概念

日本語の「武道」(Budo)を単純に英訳するならば、Japanese martial arts&The martial ways of Japan或いはThe martial arts and ways of Japanなどとなるのかも知れない。

しかしながら現在、この言葉の生みの親である日本人の大多数にとつて「武道」とは、「コンバットスポーツの低位カテゴリー」⁽¹⁾としてのマーシャル・アーツの日本版と捉へるだけでは物足りないと感じてしまふほど、頗る深遠な概念である。

つまり、「武道」と「マーシャル・アーツ」の両概念は、極めて近い意味を持つものの、無条件に代替可能なものではない。勿論厳密にいへば、どのやうな概念であれ、その翻訳が彼我にとつて全くイコールとなる事例を見つける方が難しいことは重々承知してゐる。しかし、近代日本社会の中で歴史的に形成されてきた「武道」といふ我が国固有の概念が、西洋から移入された「スポーツ」(sports)といふ国際的かつ普遍的な概念と接する中で日本特有の含意を持つ概念として明確に区別されてきたことは、もう少し注目されて良いものと思はれる。

二 主題とされた〈武道のスポーツ化〉問題

現代日本社会において、「本来の武道」とはどのやうにあるべきかといふ議論は、武道家たちの一家言のみならず、一般的な社会評論としても盛んに行はれてきた。

かくいふ評者も、空手道や剣道を少々嗜んできたこともあつて、熱を帯びた武道論を戦はせた経験が幾度もある。また、評者が勤務する國學院大學人間開発学部において担当してきた「日本の伝統文化」や「スポーツ史」などの講義科目において日本における「武道」の成り立ちを説明する際には、現在の学生たちの様々な「武道」観にも触れてきた。

そのやうな機会に必ず論点とされてきたのは、競技化や国際化、特にオリンピック競技化の傾向が著しい柔道や空手道、そしてオリンピックとは距離をとつてゐる剣道などの現代的在り方を念頭に置いた〈武道のスポーツ化〉の問題であつた。

かかる傾向に対しては、一方では日本人の誇るべき特質としての武道の精神性や伝統性、民族文化性、武術性を軽んじるものと痛烈に非難する論者がをり、他方ではこれを国際的な時代の趨勢として受け入れ、是認する向きもあり、両者間の乖離は解消し難いほど甚だしいのが常であつた。

しかし、本書によれば、〈武道のスポーツ化〉をめぐる議論は、すでに第二次世界大戦の前、大正後期から昭和初年にかけての時期（一九二〇年代）から始まつてゐた古くて新しい問題であるといふ。本書は、「本来の武道のあり方を追究する」本質論ではなく、あくまでも「より豊かな語りの流儀を生み出すため

の足場を提供」するために「〈武道のスポーツ化〉」という言説の歴史を考察すること」を目的とした純然たる学術書（早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に提出した博士論文に対して大幅に加除修正を施したもの）であり、史料を多々駆使した抑制の効いた研究である〔本書四頁。以下も同様〕。

三 本書の概要①—〈武道のスポーツ化〉問題の成立過程—

柔道の実践者であるとともに、スポーツ人類学・武道論を専門とする茨城大学教育学部准教授の著者は、「今日、武道はスポーツと伝統の二つの表情を合わせ持つ日本発の身体文化である」「一頁」と定義付けた上で、近代日本における当事者たちの「武道論」（武道の本質を問ふ態度）に着目し、〈武道のスポーツ化〉といふ問題の成立過程とその展開を詳細に検討してゐる。

具体的には、①〈武道のスポーツ化〉といふ問題はどのやうに成立したのか、②武道に関はる人々は〈武道のスポーツ化〉といふ問題へいかに対応したのか、といふ二つの課題に取り組んでゐる〔一五頁〕。六百頁を超える大冊の本書は、五部十六章を序章と結章で挟む構成である。以下に本書の概要を記し、若干の批評を加へたい。

第一部「術から道へ」——嘉納治五郎と講道館柔道の成立」、第二部「武道概念の成立——大日本武徳会の成立と西久保弘道の武道論」、第三部「〈武道のスポーツ化〉問題の出現——戦間期における武道の大衆化」では、明治維新（一九六八年）以降から昭和初年（一九三七年）までを対象として、「武道」概念と〈武道のスポーツ化〉問題の成立過程を取り扱つてゐる。

著者は、戦後に通説化した、近世の「武術」から近代の「武道」へと変遷したとする「武道の近代化論」を踏襲しない。「柔術」や「武術」といふ語から「柔道」や「武道」といふ新たな近代的概念を確立させた当事者たちである講道館柔道の嘉納治五郎や大日本武徳会の西久保弘道は、明治期における撃剣興行の存在を前提として「武術」を旧弊的かつ低俗的なものと印象づけ、その反面教師として、「術から道へ」といふスローガンを用ゐたと捉へてゐる〔五二一～五二三頁〕。

また、大正十四年（一九二五）の第二回明治神宮競技大会において勃発した大日本武徳会参加問題を契機として、「武道」と「スポーツ」の双方における精神性・競技性の相違点と共通点が注目されるとともに、戦間期（大正七年（一九一八）～昭和十二年（一九三七年））における日本スポーツの大衆化・競技化・国際化を背景とする大衆化された「消費スポーツ状況」を参考としてつづつ武道の大衆化を図らうとする動きとしての〈武道のスポーツ化〉肯定論が台頭することによつて、〈武道のスポーツ化〉問題が成立したといふ〔二三八、二三九頁〕。ただ、近年進展著しい明治神宮の創建過程や「明治神宮競技（体育・国民体育・国民錬成）大会」に関する歴史的研究の成果が十分に参照されてゐないのは少々残念である。しかし、その欠点を抜きにしても極めて重要な指摘を提示してゐるといふことができる。

四 本書の概要②—〈武道のスポーツ化〉問題の展開—

本書の第三部までは、これまでの体育・スポーツ史や武道史・

武道論の諸研究においても度々言及されてきた著名な事柄に關する再検討の趣が強いが、著者の本領が発揮されてゐるのは、〈武道のスポーツ化〉問題に対応した人々の動きを詳しく考察した第四、五部である。

第四部「〈武道のスポーツ化〉問題への対応 その①——藤生安太郎と武道の国策化」では、佐賀選出の衆議院議員で「日本精神」や「神」（神道）と「武」（武道）が密接不可分とする「国体」観に基づき、柔道の国際化を批判するとともに武道の国策化を推進した藤生安太郎による〈武道のスポーツ化〉批判が、昭和十三年（一九三八）二月の第七十三回帝国議会衆議院における武道国策化に關連する諸建議案を導いたと指摘する〔四一三、四一七、四一八頁〕。評者が所持してゐる藤生の名著『武道としての相撲と国策』（大日本清風会発行）が初版発行から一年経過した昭和十四年十一月一日付の「第十六版発行」であることから、当時のベストセラーを生んだ彼の大きな影響力が窺ひ知られ、首肯できる見解である。

さらに著者は、同年十二月の武道振興委員会設置、昭和十六年十一月の厚生省人口局練武課設置、同十七年三月の陸軍・海軍・文部・厚生・内務五省共管による「武道綜合団体」としての大日本武徳会設立へと推移した武道の戦時体制においても、「戦技化」は構想されたが、結局各省間の「武道」概念や武道行政の一元化はなされず、究極的には神祇院（昭和十五年十一月に創設された神社行政を管轄する内務省外局）と合体した内閣直属の「神武院」を理想としてゐた藤生の武道論とは掛け離れたものであつたことを冷静に明らかにしてゐる〔四一七頁〕。

次いで第五部「〈武道のスポーツ化〉問題への対応 その②

——古武道の誕生」では、内務省の神社局長や警保局長、貴族院議員として活躍した松本学が、安岡正篤による「日本精神」論や「真剣味」といふ思想の影響を受けつつ、形稽古の正統性を主張する一方、試合志向を否定する（〈武道のスポーツ化〉批判を展開する中で、昭和十年二月に「日本古武道振興会」を設立し、〈スポーツ化〉した「武道」（柔道、剣道等）から零れた日本各地に存在する武術諸流の総称として「古武道」概念を提唱したことを詳細に跡付けてゐる「五二六、五二七頁」。

この「古武道」概念は、昭和十六年に登場した、「国防国家」に即応した武道・体育の戦技化を指標とする「新武道」概念と対照化されたが、武術諸流の存続を支へ、現在に至つた積極的な面もあるといふ「五二七、五二八頁」。

五 本書の意義と今後の国際的・学際的課題

著者も言及してゐる通り、日本の「武道」概念についての歴史的研究は、近代における大日本武徳会や講道館柔道に着目した木下秀明や坂上康博、井上俊による考察のほか、より長いスパン（西暦十二世紀末から現代まで）の通時的検討を加へた寒川恒夫による近年の研究が重要な先行業績として挙げられる³⁾。

本書は、これらの研究成果を十分に踏まへつつ、これまで正面からは扱はれて来なかつた戦間期（大正七年（一九一八）〜昭和十二年（一九三七年））の武道史に力点を置いた研究である「二四、二五頁」。近代武道史に関する主要な事柄を網羅して論じた本書は、当該テーマの最前線を走る研究といへよう。

また、近代日本社会をフィールドにした本書のユニークな成

果は、世界各国における固有のマールシャル・アーツ的身体文化と「スポーツ」概念との歴史的関係の事例とを照らし合はせることにより、極めて有意義な国際文化比較となり得る。

なほ、本書の主題では無いものの、行論の中で何度も触れられてゐる「昭和天覧試合」からは、「天覧」が総体としての「武道」の社会的地位向上をもたらした大きな契機となつてゐたことが窺ひ知られる⁴⁾。また、平安神宮・明治神宮と大日本武徳会との関わり、日本古武道振興会における奉納演武大会の多くが全国各地の神社境内や外苑、神苑などを会場としてゐたことなど、神社と武道との関係を示す事例も頻繁に登場するが、これらの史実は今後、「神道史」と「武道史」を架橋する観点からその歴史的意義を精緻に検討する必要がある。

さらに評者は、本書が解明した「武道」概念と「スポーツ」概念との関ぎ合ひといふ史実から、近代日本社会における「神道」(Shinto) 概念と「宗教」(religion) 概念との間の複雑な歴史的関係を想起せざるを得なかつた。どちらも日本固有の概念と外来概念との組み合わせである。勿論完全なアナロジーとして捉へることは難しいが、近代日本社会といふ時空の中で、いづれも非常時に日本精神論や国体論の重要な要素とされ、時には互ひに結び付けられて論ぜられることもあつた「武道」と「神道」の概念史を丹念に比較検討する作業は、日本文化史の全体像を読み解く重要な方法の一つになると思はれる。

(A5判、国書刊行会、平成二十九年七月二十四日発行、六〇八頁＋xi頁、定価 八〇〇〇円＋税)

註

(1) Tomlinson, Alan. 2011. *The World Atlas of Sport: Who plays What? where and why*: New Internationalist 72 (フラン・トムリンソン著〔阿部生雄・寺島善一・森川貞夫監訳〕『スポーツの世界地図』丸善出版、平成二十四年、七〇頁）。

(2) 高嶋航『帝国日本とスポーツ』（塙書房、平成二十四年）、藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編『明治神宮以前・以後—近代神社をめぐる環境形成の構造転換—』（鹿島出版会、平成二十七年）などを参照。なほ、関連する拙稿としては、「明治神宮外苑造営における体育・スポーツ施設構想—「明治神宮体育大会」研究序説—」（『國學院大學人間開発学研究』第四号、平成二十五年）、「明治神宮競技大会創設と神宮球場建設に関する一考察—内務省衛生局と学生野球界の動向を中心に—」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第九号、平成二十七年）、「神宮競技問題」の推移と「明治神宮体育大会」の成立」（『國學院大學人間開発学研究』第六号、平成二十七年）、「昭和初年における明治神宮体育大会の歴史的意義—学生参加問題と昭和天皇行幸を軸として—」（『國學院大學人間開発学研究』第八号、平成二十九年）、「明治神宮外苑拡張構想と幻の東京オリンピック」（『國學院大學人間開発学研究』第九号、平成三十年）などがある。

(3) 木下秀明『スポーツの近代日本史』（杏林書院、昭和四十五年）、坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略—』（講談社、平成十年）、井上俊『武道の誕生』（吉川弘文館、平成十六年）、寒川恒夫『日本武道と東洋思想』（平凡社、平成二十六年）などを参照。

(4) 前掲拙稿「昭和初年における明治神宮体育大会の歴史的意義—学生参加問題と昭和天皇行幸を軸として—」を参照。

(5) 拙稿「神社対宗教問題に関する一考察—神社参拝の公共性と宗教性—」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第七号、平成二十五年）、同「國學院大學における建学の精神「神道精神」の基礎的考察」（『國學院大學校史・学術資産研究』第一〇号、平成三十年）、同「国家神道」概念の近代史」（山口輝臣編『戦後史のなかの「国家神道」』山川出版社、平成三十年）を参照。

【附記】

本稿は、英国ウェールズのカーディフ大学出版会が発行してゐる電子版査読付き学術誌の“Martial Arts Studies Journal” (MAS Journal <http://masjournal.org.uk/>) における「日本の武術研究」をめぐる特集号（カーディフ大学のポール・ボウマン教授と早稲田大学国際教養学部マイク・モラスキー教授が共編）に邦文での寄稿を求められ、それをマイク・モラスキー (Michael Molasky) 教授が英訳して掲載されたBOOK REVIEWの元原稿に手を加へたものである。なほ、英訳に当たっては相当意訳もなされてゐるが、かなりタイトなスケジュールではあつたもののモラスキー教授と幾度も相互にやりとりして英文の訳語や表現を確認する作業を行った。英文書評の書誌情報は次の通り。

BOOK REVIEW : Kindai Nihon no budoron - (budo no supotsuka) mondai no tansu [Discourse on Budo in Modern Japan -The Origins of the · Sportification of Budo- Problem] Tetsuya Nakajima Kokusho kankokai, 2017 608 + xi pages ("Martial Arts Studies Journal" Issue 6 Cardiff University Press 2018.7.24 p106-p110 MAS Journal URL <http://masjournal.org.uk/> 平成三十年十一月八日閲覧)

また、本稿は、『神社新報』第三三七五号（平成二十九年十月二十三日付）に掲載された書評をもとにしてゐるが、改めて全体を見直した上で学術的体裁を施し、海外研究者向けの論点を加へるなど、大幅な加筆を行つて改稿したものである。それ故、本書に対する邦文の学術的書評としては未発表の原稿である。さらに本稿作成に当たつては、見出しを付けて典拠を増やし、仮名遣や年号表記、註の表記法などを改めてゐる。

※本稿は、平成三十年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）「帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成」研究課題／領域番号…一八H〇〇七二二、研究代表者…高嶋航）による研究成果の一部である。

（ふぢたひろまさ 國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）